

指導内容の価値性を高める授業構築の教育方法

著者	中川 洋一
雑誌名	北翔大学教育文化学部研究紀要
巻	3
ページ	223-232
発行年	2018
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002640/

指導内容の価値性を高める授業構築の教育方法

Education method of lesson construction to raise value of guidance contents

中 川 洋 一
Yoichi NAKAGAWA

I 授業改善が求められる背景

21世紀型能力が国から提唱されて以来、「汎用的な資質・能力」「人との関わりの中で課題を解決できる力」「教科内容の深い学び」の育成を核とした教育課程編成や授業の在り方が求められている。特に、知識・技能などの基礎力ばかりではなく実践力として使える力まで繋がる思考力・判断力・表現力の育成が重視されており、その中心となるのがアクティブ・ラーニングの言葉で代表される「主体的・対話的で深い学び」を具体化する教育課程及び授業改善である。

次期学習指導要領の完全実施を目前に控え、各学校は、この「主体的・対話的で深い学び」の具体相を模索し、様々な実践に取り組んでいるところである。

しかしながら、様々な取組の中には、例えばアクティブ・ラーニングを形態論として捉え、何か子どもが活動していればよしとして、目標達成の道筋や目標達成そのものを、ややおろそかにしている内容のものが見えるのも事実である。

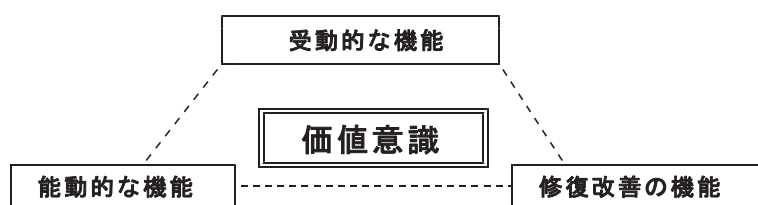
本稿では、指導内容に価値性を持たせ、高めるための授業改善の在り方について、各学校が配慮すべき観点について述べることとする。

II 子どもの“価値意識”に着目する

一般的に、“意欲”というと、積極的である、やる気がある、自ら進んで、など、前向きな姿勢を一括して使われる場合が多い。しかしながら、一見、動きの少ない子どもでも、常に頭の中で思考を繰り返していたり、関連付けて納得がいくまでは言葉や行動に表せない、あるいは、素晴らしいアイデアや考えを持っていても羞恥心が先に出てしまい、人前での行動がためられるという子もいる。

そこで、“意欲”については、教育の場面とりわけ授業の場面においては、“価値意識”という表現で考察していきたい。そうすると、価値意識には、行動化を促す機能があると仮定し、次の2つのくくりで捉えることができる。

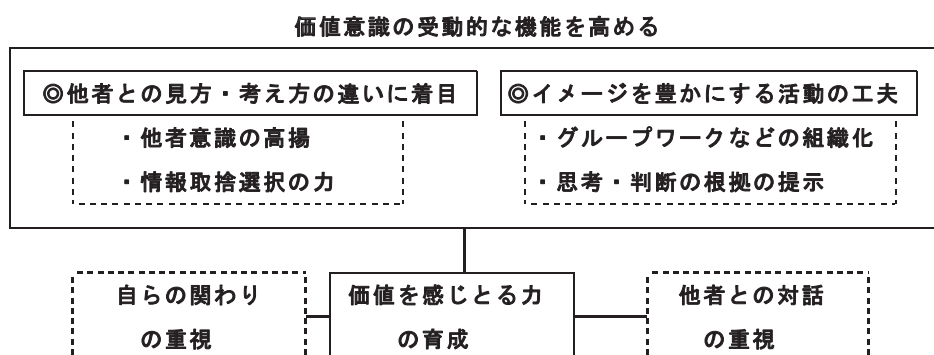
- ①「受動的な機能」……価値を感じとる
- ②「能動的な機能」……新たな価値を生み出す



1 価値意識の受動的な機能を高める観点

受動的な機能とは、価値を感じとる力である。物事に潜む価値に気が付き、自分自身の問題としてその価値性を明らかにしようとする関わりを持つ力を育てることが、主体的といわれる資質・能力の育成には不可欠と考える。

具体的な授業の場においては、問題解決の場において、問題そのものに気が付き解明しようとする動きを大切にしたい。特に、問題を解決していく過程で他者との見方・考え方の違いに気が付き、話し合いや各種活動の中でイメージを豊かにできる力を育てるのである。



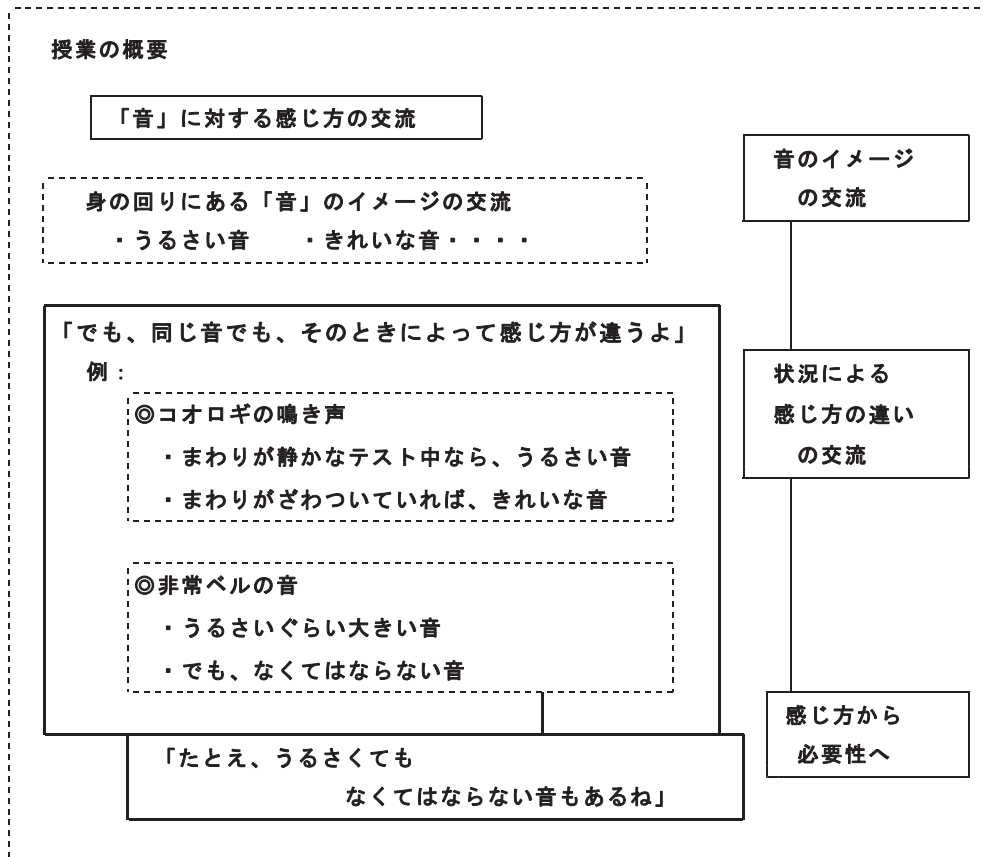
実践校事例から

札幌市K小学校 3年生

総合的な学習 単元「くらしと音」

本授業を通して価値意識の受動的な機能を高める観点

- ①比較思考の力の育成……比較による認識の深化を図る
- ②表現力の育成……未分化な語彙の開発を図る
- ③論理性の育成……状況的なとらえを相対比較し、論理の形成を図る



～本授業にみる価値意識の受動的な機能を高める活動の様相～

①比較思考の力の側面

◇「比較」による認識の深化（第三者的視点の拡大）

○他の人との「音」の感じ方の違いの意識化

・それぞれの音をどのように感じるか、の交流

○イメージを膨らませる活動の工夫

・他者の感じ方との比較や「似ている音」探しによるイメージの拡大

②表現する力の側面

◇未分化な語彙の開発を通して表現力の育成を図る

○「言語」を駆使して伝達する場の工夫

・自分なりの感じ方を他者に伝えるために、表現する事柄や方法をいろいろな

「言語」を駆使して表す活動の設定

○別の表現への置き換えの工夫

- ・語彙の不足部分を、他の表現で表す活動の設定

③論理性を育成する側面

◇状況的なとらえを相対比較として位置付け、論理を形成する

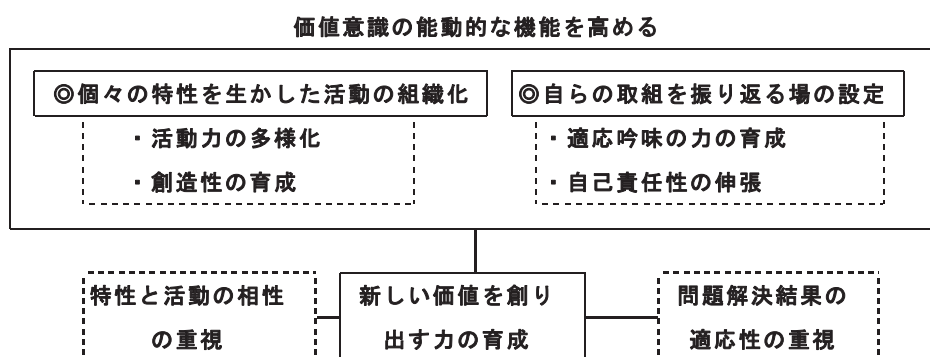
○同じ事柄に対して、相対としてとらえた場合の違いの意識化

- ・同じ音でも、まわりの環境や状況によって快適音の場合と騒音や不快音として感じる場合がある
- ・相対的な比較を説明するために、各状況を根拠づける必要があり、根拠の部分に論理性が育つ

2 価値意識の能動的な機能を高める観点

ここでは、子どもの価値意識の能動的な機能を高めることについて述べる。価値意識の能動的な機能を高めるとは、問題解決から学び取った知識・理解、技能などをリテラシーとして駆使しながら新しい価値を創り出す力を育成することである。

授業においては、問題解決のプロセスで、子ども一人一人の持つ、個々の特性を生かした活動場面の組織化を図ること、子ども自身が自らの取組を振り返る場を設定することを通して、授業で身に付けた“見方・考え方”を違う問題解決の場においても応用・発展させ、そこに新たな価値を生み出すことをねらいとするのである。



実践校事例から

札幌市H小学校 4年生

総合的な学習 単元「やさしさ見つけよう」～おじいちゃん、おばあちゃんに自分たちの作ったラジオドラマを聞いてもらおう～

本授業を通して価値意識の能動的な機能を高める観点

①活動に取り組む視点形成力の育成……問題解決のあの手この手

- ②情報取捨選択能力の育成……問題解決の目的と対応する情報
 ③適応を吟味する育成……問題解決結果の一般化への適応

授業の概要

※ラジオドラマ「大造じいさんと
 がん」の制作を場面毎にグループ
 で行う活動

◎ A、Bの2つのグループ作品を比べて聴く

「おじいちゃん、おばあちゃんに
 楽しんで聴いてもらえるには・・・」

よ い 点

工夫改善すべき点

両グループの比較

○よい点の共有化

BGM、ナレーションの声、効果音、セリフなど

○工夫改善すべき点の共有化

※工夫の観点の整理

- ・「心の声」をうまく表現するには・・・
- ・お年寄りにも聞きやすい声の大きさ・・・
- ・「ラジオ」は、テレビと違い、目には見えない、
 耳にしか訴えないから・・・
- ・聴くことに対してのわくわく感は・・・

お互いのグループの良さを交流できたね。
 今まで、思いつかなかったことが、たくさん
 気が付けたね・・・

- ・お年寄りに、もっと、わかりやすく喜んでもらえる
 ラジオ番組を作るには・・・

お互いのグループ
 のよさや工夫点の
 交流

比較により、工
 夫すべき点の要
 素を洗い出す

工夫改善すべき
 観点や内容を
 目標に照らして
 再確認し、新た
 な活動へ

～本授業にみる価値意識の能動的な機能を高める活動の様相～

①活動に取り組む視点形成力の側面

◇活動の質を高めるためのあの手この手を身に付ける

○活動に取り組む視点を持つ

- ・ラジオドラマの特性である「見えないものを見えるように表現する」ための方法の交流
- ・必要な要素を発見する力を大切にする

②情報取捨選択能力の側面

◇活動の目的にあった情報内容の選択能力を培う

○問題解決の方向性と選択する情報の整合性

- ・「お年寄りにわかりやすい」内容にするために必要な事柄の洗い出し
- ・他者情報も含めて、取捨選択した情報内容を関連付ける活動
- ・関連付けた各種情報を、問題や目的に合わせて再構成する活動

③適応を吟味する力の側面

◇取り組んだ内容について、目標との整合性を整えたり、一般化させる力を培う

○再構成したり、導き出した結論が、問題の目標に適合するかの振り返り

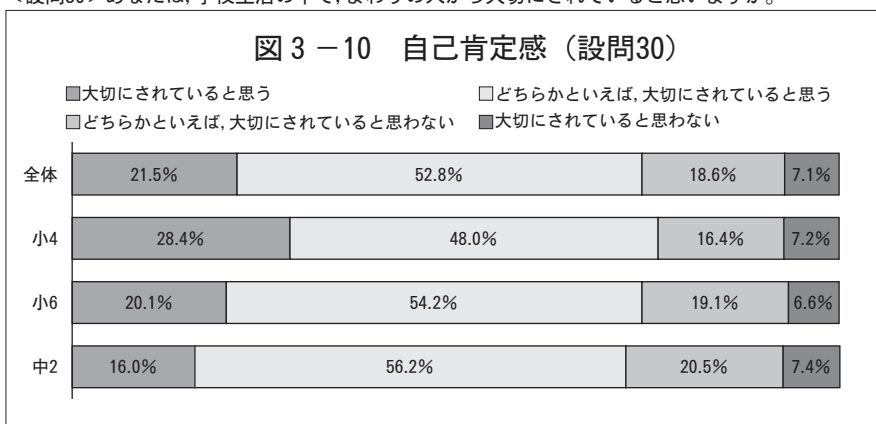
- ・つくりあげたものが、自己満足に終わっていないか、他者を意識した一般的な価値として受け入れられるものかの吟味

Ⅲ 価値意識とともに「修復改善の力」を育てる

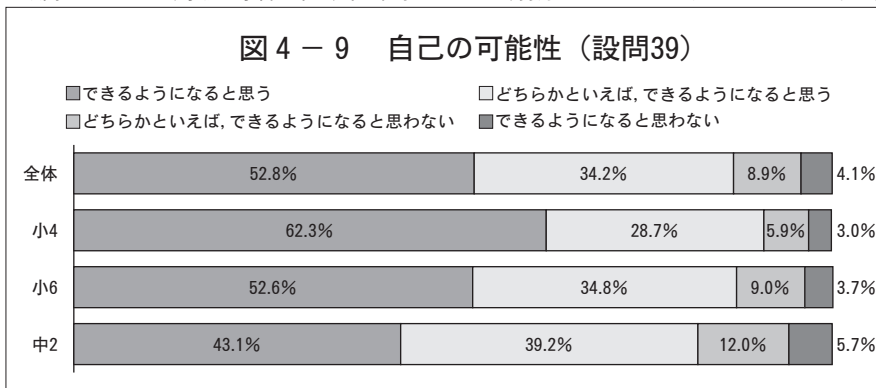
価値意識を育てることは、一人一人の子どもに、「確たる自分」としての意識を育てることにもつながる。大きくは、価値意識を持つということは、自ら判断するための根拠を身に付けることを意味する。これまで述べてきたように、問題と対峙したとき、その問題と向き合い解決に向けて取り組むための方法論やリテラシーなどを身に付けていることは、様々な判断の場におけるその子の行動を良い意味で制御する。

しかしながら、日本の子どもは、資料①にあるように、自分に自信が持てない傾向を示す子の比率がやや高い。一方で、資料②にあるように、「自己の可能性」を信じている子の割合は非常に高い。つまり、「自分は、今は、自分らしい力を発揮していないが、可能性としては十分に持っている」と考えているのが日本の子どもの傾向と言える。

<設問30> あなたは、学校生活の中で、まわりの人から大切にされていると思いますか。



<設問39> あなたは、学校の学習の中で、今は苦手なものでも、努力したらできるようになると思いますか。

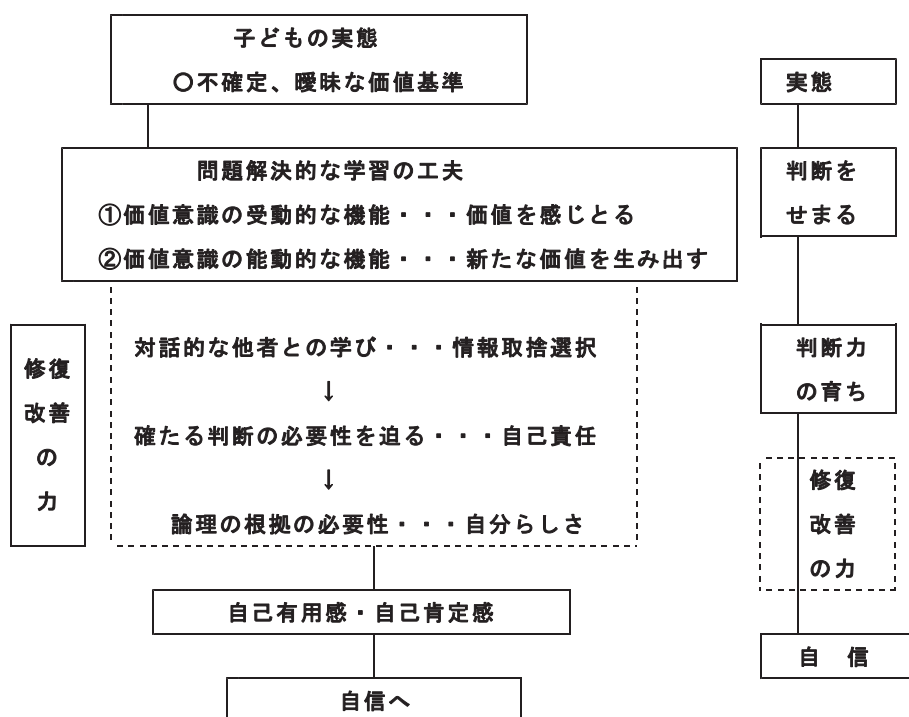


※資料①及び資料②

平成27年度 指定都市教育研究所連盟 第17次共同研究
～これからの時代を生きる子供たちの姿や思いを探る～ より

1 修復改善の力を「判断力」とともに育てる

授業の場においては、基本的に、次に示すような流れで「判断力」を育てたい。



主体的・対話的な学びを推進する上で、自らの判断に自信を持つことは大切なことである。授業においては、自分の考えや行動を確定していくときの判断の傾向や内容に、自分らしさが潜んでいることを自覚させ、それぞれの状況における判断の拠り所を重視し、自信を持つようにすることが、その子の判断力を確かなものとしていくことになる。

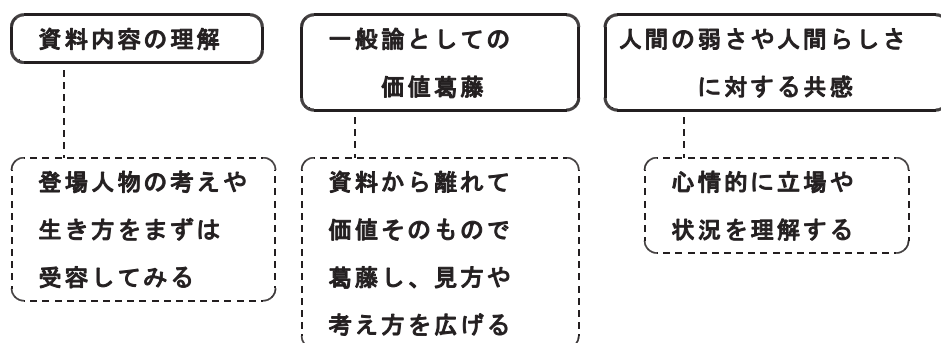
価値意識を重視した授業の過程で、自信を持つことができるように、組織化していくことは、子どもが、「自らの考えや取り組み」が、たとえ結果が他者と異なったとしても、問題解決の方向性や目標に向かう拠り所に、確たる判断があったとすれば、「自分には、修復改善する力が潜んでいる」という意識を持たせることが可能になると考える。

2 その子なりの「根拠」と「自信」（道徳を例に）

「判断力」の高まりが、子どもに自信を持たせ修復改善の力に繋がると考えると、判断の根拠となる要素を洗い出しておく必要がある。ここでは、道徳の授業を例とする。

一般的に、道徳の時間の授業は、次のような構造になっている。つまり、「資料内容の理解」「一般論としての価値葛藤」「人間の弱さや人間らしさに対する共感」の3つである。

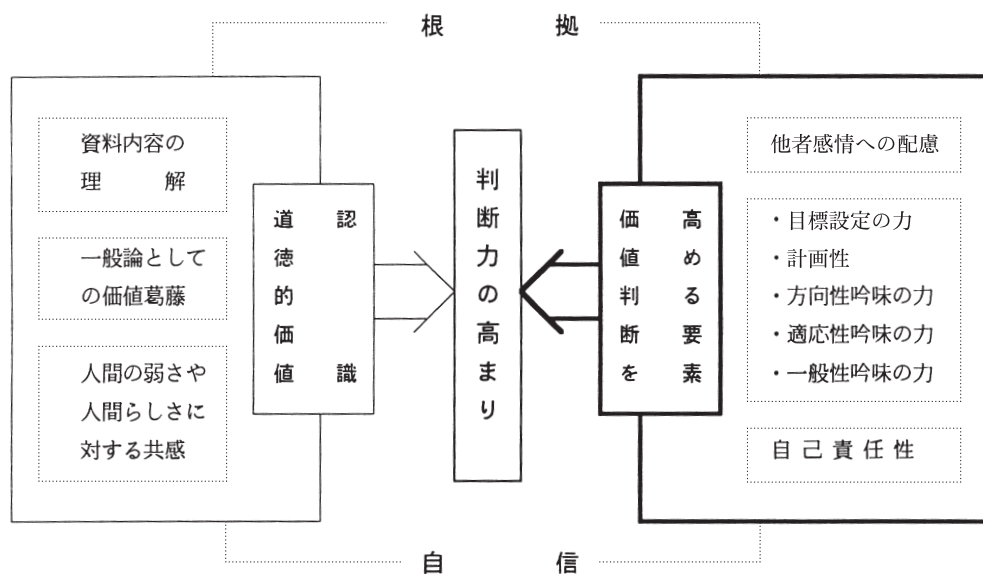
一般的な道徳の授業の基本



資料内容の理解、価値葛藤、人間の弱さや人間らしさへの共感、といったものが、道徳的価値そのものに対する認識を深めると考えるなら、これらの要素群は、道徳における基礎基本を構成すると言える。

一方、価値意識の分析や判断の拠り所（要素）の観点から教材や授業を見直すことは、今、目の前にいる子どもが抱えている実態（価値判断や意思決定基準の曖昧さ）に迫り、その子なりの判断の必要性を作り出す上で有効と考える。

つまり、道徳としての“基礎基本”となる要素と、“価値判断を形成”する要素の両面から教材を展望することが、子どもに、その子なりの根拠を持たせ、さらには、判断への確たる自信を持たせていくことにつながるのである。



IV まとめにかえて

授業改善について、価値意識の観点を中心に述べてきた。やはり、授業を通しながら、子どもに判断を迫る場合の要素を、あらかじめ教師が把握し、一人一人の子どもの特性に合わせた教材の提示や授業展開方法を研究していく必要があり、そのことが、子どもの修復改善の力にもつながると考える。この修復改善の力により身に付いた見方・考え方は、教科等の学習ばかりではなく、生活の場における心の強さ、打たれ強さにもつながっていくものとする。

参考文献

- 1 新学習指導要領 公示 文部科学省 (2017)
- 2 次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめについて 文部科学省 (2016)
- 3 指定都市教育研究所連盟 第17次共同研究 ～これからの時代を生きる子供たちの姿や思いを探る～ 指定都市教育研究所連盟 (2015)
- 4 心の成長を支える教育に関する研究 北海道立教育研究所 (2000)
- 5 子ども一人一人の自立を支える学校の創造 北海道教育大学附属札幌小学校 (1993)